

この枠で囲んでいる箇所がイラスト(さし絵)の課題場面です。

この枠で囲んでいる箇所がイラスト(さし絵)の課題場面です。

イラスト(さし絵)部門
《一般の部》

課題
原稿 **小さな蜂飼い姫のはなし**

ストーリー部門
一般の部最優秀賞
作：夏野いばら

※こちらの原稿は、中学生以上対象の課題です。

イラスト(さし絵)部門
《子どもの部》

課題
原稿 **にじいろのはちみつ**

ストーリー部門
子どもの部最優秀賞
作：松村 高臣

※こちらの原稿は、小学生以下対象の課題です。

課題 2

② ある日。お姫様は森の中で、不思議な四角い箱をみつけました。

たくさんミツバチがブン、ブン、ブン、出たり入ったりしているのです。

「すーいー！これはきつと、ハチのお城よ！中はどうなっているの?」

それは、ミツバチの巣箱でした。

「しーっ…しずかに。ハチがびっくりしちゃうだろ」

世話をしていた蜂飼いの少年が、そーっと、箱の中から巣わくを取り出して、見せてくれました。

課題 1

表紙

① むかし。小さくて、これと言ってとりえのない国に、小さなお姫様がいました。歌やお絵描きがとっても上手、というわけでもなく、とりたててお勉強ができるわけでもない。

ま、これと言って、とりえのないお姫様でした。

ただ、小さな虫が大好き。

「ちよ、ちよっと、お姫様！どこに行かれるのです!？」

どこに行っても、小さな虫を追いかけまわしてしまいました。

③ その日からもう、お姫様は、ミツバチに夢中。毎日、森に通っては

「このハチは?」どこで何をしているの?」

「ハチミツは?」いつ出来るの?」

少年を質問せめにするのでした。

④ お姫様は、とりたてて器用でもなかったのですが、夏には、ハチミツ採りを手伝いませした。

秋の終わりには、巣箱の冬囲いを手伝いませした。

⑤ さて、お姫様が十歳の誕生日を迎えたときのこと。

王様からたずねられました。

「姫や、プレゼントは何がほしい?」

「ミツバチの巣箱を下さい!」

王様も家来たちも、びっくり。

「自分で蜂を飼うつもりかい?」

さっそくあの少年が呼ばれ、広いお城の庭に、巣箱がいくつか、すえられました。

裏に続く

課題 1

表紙

課題 2

① きいろ のはちみつをつくったのは きりんさん

② みどり のはちみつをつくったのは かまきりさん

③ あか のはちみつをつくったのは ひ(火)とかにさん

④ みずいろ のはちみつをつくったのは おみずさん

⑤ おれんじ のはちみつをつくったのは すっぱいみかん

⑥ ぴんく のはちみつをつくったのは おんなのこのすかーと

⑦ あお のはちみつをつくったのは うみのおさかなさん

⑧ ちやいろ のはちみつをつくったのは おつまさん

⑨ しろ のはちみつをつくったのは ゆきだるま

⑩ くろ のはちみつをつくったのは よるとありさん

⑪ むらさき のはちみつをつくったのは こうちゃんのおぶぶぶ

⑫ きみどり のはちみつをつくったのは はっぱさん

⑬ はいいろ のはちみつをつくったのは わらじむしとねずみさん

⑭ ごーど のはちみつをつくったのは きんめだる

⑮ にじいろ のはちみつをつくったのは ぼくとはちさん

課題 3

⑮ にじいろ のはちみつをつくったのは ぼくとはちさん

課題3

⑥ すると、不思議。次の年、お城の庭のリンゴや栗の木が、いつもよりたくさん、しかも立派な実をつけたのです。

「ミツバチが、受粉を手伝ったんですよ」

⑦ それから毎年、お姫様は、誕生日のたびに、お城の周りに新しい巣箱をおいてもらいました。

花や木の苗も、たくさん植えてもらいました。こうして、それまで、これと言ってとりえのなかった国に、豊かな緑が少しずつ、広がっていきました。

⑧ やがて月日は流れ…。十八歳の誕生日。

大人になったお祝いに、お姫様は大きな倉庫を作ってもらいました。

いつのまにか国中で、たくさんとれるようになったハチミツを入れておくためです。「そんなにためこんで、どうするつもりだ？」

王さまも家来も、あきれ顔。

「まだまだ、やりたいことがあるんです。」

⑪ 東の国の王様も、北の国の王様も、

「武器をよこせ。さもないと、攻め込むぞ」と、小さい国をおどしてきました。

「武器はありませんが、ひとまず、これをどうぞ」

お姫様はこっそり、東の国に「はちみつ飴」を、北の国には「みつろうソク」を届けさせました。

どちらも、あの少年に教えてもらいながら、お姫様が家来と一緒に、特別に作っていただいたものでした。

（少年といっても、その頃にはもう、立派な青年になっておりましたが）

⑫ するじ、

「何とおいじりーしかも元気が出る飴だ」

「何と便利ーこのろうソクは消えにくいーおまけにとても、良い香り」

二つの国の王様は、それぞれに、

「武器はもうよい。同じものを、もっとおくれー」

と書いてきました。

こうして、小さな国は、戦争にまきこまれずにすんだのです。

⑨ ところが、次の年。

日照りつづきで、あたりの国々を大変なききんがおそったのです。

どの国も、秋になっても、ほとんど作物はとれません。

「どうしよう、もう食べ物がほんの少ししかない…」

でも、小さい国の人々は無事でした。

パンがひとかけらしかなくても、お姫様が倉庫から出したはちみつをつけて、しっかりと食べる事ができたからです。

⑩ けれども、そのききんは、周りの国々を追い詰めてしまったようでした。

食べ物をめぐって、国々の王様もイライラ、いら立ちがつのりました。

しばらくすると、お隣の東の国と、北の国との間で、戦争が始まってしまったのです。

⑬ 小さな国の人々はー王様もふくめてーようやく、お姫様がたいそうハチ好きでよかった、と思うようになっていました。

お姫様はこの、とりえのない小さい国を、ミツバチで守っていたのです。

⑭ お姫様はそれから、ずっと、ハチと緑を大切にし、人々を大切にしました。

それは、お城にお婿さんを迎えてからも、ちっとも変わりませんでしたよ。

え？ 誰と結婚したのか、ですって？

それはご想像におまかせしましょう。でも、人々はその頃から、お姫様のことを「蜂飼い姫」と呼ぶようになったそうです。

⑮ 「蜂飼い姫、ばんぎょー」

人々が叫ぶと、お姫様は笑って言ったそうです。

「あら？ お礼なら、ミツバチさんたちに言っただかいな」

小さな蜂飼い姫のお話は、これでおしまい。ブン、ブン、ブンー！